

序

私は消化器外科出身ということもあり、以前からバクテリアルトランスロケーションや栄養には非常に興味があり、救急、集中治療の分野に移った後も、重症患者の栄養管理は患者管理の基本と考え、積極的にかかわってきた。また、20年近く、ポリクリ学生や若手医師に輸液や栄養を教えてきた。

American Society for Parenteral and Enteral Nutrition (ASPEN) は1980年代からエビデンスに基づいたガイドラインを作成してきており、大いに参照してきたが、その後に発表された多数のガイドラインも含め、その表記は非常に曖昧で十分には満足できるものではなく、実臨床では自分でさらに工夫しながら行ってきた。

そのような過程で、栄養に関する書籍を編集させていただける機会をいただけたので、この機会に、栄養の基本だけではなく、今まで疑問に思ってきた多数の詳細な点や実際にどう行うべきかを明確に記載いただく企画とした。また、記載に際して、どこまでわかっている、どれくらい確かであるか（信憑性があるか）について明確に記載いただいた。依頼原稿にもかかわらず、複数回の大幅な書き換えをお願いした執筆者の方々にはこの場をお借りし謝罪致したいが、そのお陰で、今までにない、栄養の書籍となったと自負している。

この1冊で、栄養に関しての現時点でのエビデンスを把握できるだけでなく、これらに基づいて専門家が実臨床でどのように行っているかを理解いただけると思う。この書籍によって栄養での最良の知見を理解いただき、実臨床での患者管理に役立てていただき、救いえる重症患者を一人でも多く救っていただければ本望である。また、栄養に関してのエビデンスは決して十分でないことを理解いただき、臨床での課題や問題点が明らかにされ、次なるリサーチを行っていただき、さらなる診断や治療法の開発の契機となれば、望外の喜びである。

2014年10月

真弓俊彦